研究所創設40周年に寄せられた声

「地域」という視点を教えてくれた研究所

青柳勇治

私は一九八六年に教職に就いた。研究所の発足が八四年であるから、ほぼ研究所の歩みは私の教員人生と重なる。木村隆利先生のお誘いで研究所の会員となった。入会したのは学生の時か、新採用の時か忘れたが、一万円の会費は高いと思った。しかし、木村先生が研究所の意義を『地域』という視点で熱く語ってくださったことに魅力を感じて参加した。当時の私は民間教育運動に貢献したいという思いがあったので、作文の会、全生研、教科研など様々な研究団体に誘われるままに入って学んだ。後になって会費や雑誌代が、かなりの額になってしまったことが懐かしい。

この間、研究所の活動に積極的に参加したわけではないが、研究所主催の学習会など自分の興味関心に応じて参加した。研究所の持ち味は、教育を学校に限定して捉えるのではなく、地域の課題は何か、その課題は学校にどのように影響しているか、国の施策は地域や子どもたちにどのような影響を及ぼしているかなど、「地域」という視点で分析・検討しているところにあった。

『にいがたの教育情報』は一四一号と号数を重ね、過去四〇年間の新潟県の教育課題が網羅されている。すばらしい成果である。会員減少などの課題はあるが、研究所の継続・発展に微力ながら貢献したいと願っている。

（あおやぎゆうじ・小学校教員）